

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 25 号

平成 16 年 5 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

矢内原忠雄全集第 17 巻より(4)

卒業式

経済学部学生から卒業記念アルバムに題字を頼まれて、左の四行を書いた。

「卒業は出発である。

人生に卒業はない。

真理は永遠である。

人類に平和あれ。」

米国の大学では卒業式のことを Commencement（出発）といふ。後をかへりみないで、前を見て進むその精神はよい。人生に区切りはあるが、卒業はない。死でさへも、新なる出発である。信仰はかく常に積極的であり、進取的である。

失敗の幸福

誰しも好んで落第する者はないが、落第生にはまた落第生でなければ得られない幸福がある。それは人生の目的が何だあるかを考へ、神により頼む信仰を学ぶ機会となることである。

この事において、病者も亦落第生と同様である。病者は健康における落第生である。而も信仰を学ぶことにおいて、病者はしばしば

健康者よりも幸福である。

合格者もよく、落第者もよい。人生の幸不幸を決めるものは、その人の境遇ではなくしてその人の信仰である。

歳末の感謝

神よ、我らの兄弟姉妹を、その各自の境遇においてお守り下さい。皆それぞれの重荷と、悩みと、苦しみを背負うて居るのです。その重荷に押しつぶされて信仰を失ふことなきやう、一人一人を助けて下さい。汝を避所として、そこに平安を見出し信仰によりてすべての問題に当たることを得させて下さい。

感謝と同情

クリスマスが来て、まず思はれるのは、神に対する感謝である。もしイエスが生まれ給はなかったとすれば、なんと我々の心はみじめで、平安も希望もなく、不平と不満の中に生きていることだらう。我々は神が愛であることを知らず、人生の意味もわからずに、空しく暮していることだらう。それを思えば、神の子イエスがこの世に生まれ給うたことは、いくら感謝しても感謝しつくせぬ思ひがする。

クリスマスに於いて神の恩恵を思へば、我々にイエスの福音を教へてくれた先生や、親や、先輩や、友人や、又キリストにありて我々を愛してくれた人々に対する感謝の思ひが、おのづと湧き出でる。それらの人々に対する感謝によって、我々の思ひがあたためられることは、クリスマスの楽しさの一つである。

神に対し、又人に対する感謝の心から、弱き者、悩める者、病む者、貧しき者への同情がおのづと心に溢れてくる。これは自分が豊かで、相手が乏しいからではない。そのような、自他の貧富を比較しての事柄ではなく、キリストにありておのづと湧き出でる同情である。だからしばしば貧者は富者よりも、より大いなる同情心をもつのである。

内村鑑三

先生の日（注 3月28日）がまためぐって来ました。先生の天に召された年は1930年でありますから、覚えやすい年です。もう22年経ちました。

私のたましひにやきつくばかりの一人の「先生」を与えられたことは、私にとりまして最大の感謝であります。

先生は私どもに、「先生のまねをするな」といましめられたことがあります。私は先生のまねをしようと意識したことは一度もありません。かへって、外形的には先生からの独立を保つことにつとめました。しかし今になってみると、私の血肉の大部分を形成するものは、私ではなくて、先生であるやうに感じられます。先生、おなつかしう存じます。どうぞ、地に留まって先生のたたかひを受けついでいる者に、力をそへて下さい。

傷める葦

「傷める葦を折ることなく、けぶれる麻を消すことなし。」神の愛の細やかさを言って、これに勝る言葉はない。私の信仰が今に尚保たれて居るのは、この神の愛によるのである。

私もまた人に対してかくありたいと、幾度心に誓ったことであらうか。しかも我が性陰しく、わが心曲れるがゆえに、幾度か傷める葦を折り、煙れる麻を消した。

限りなき悔恨を以て私は年頭に祈る、神よ今年はそのことなからしめ給へと。

執筆について

短い文章を書くことは、長い文章を書くよりも困難である。そこには、はち切れるほどの感動が凝結しなければならぬのである。

神が言葉を与えた舞うのでなければ、気合のこもった短文は書けない。私にむかって毎号短文を書けと注文する読者は、おそらく文章を書くことの困難を知らない人であらう。

読者の質問

信仰上の問題は、何ひとつとして人間の頭脳で簡単に理解し得るものはない。それは我々の一生かかって、人生の涙と汗のの中に学んでいくべき事柄である。いな、一生かかっても、「理解した」とは言ふことの出来ない性質の事柄である。

たとひわれわれの質問に対して先生から解答が寄せられたとしても、われわれ自身の経験を通してみづからそれを学ぶまでは、生きた自分の知識とはならない。活きた信仰上の知識は、われわれ各自に対する聖霊の直接の働きによってのみ得られる。

それゆえに信仰上の知識を得るために必要な第一のことは、いつでも聖霊の啓示を受けることが出来るやう、我々の心を静かに神に居ることである。次には、われわれの生活を通して信仰を実践して行くことである。かうしてあせらないで居れば、必要な知的理解は必要な時に与えられる。一番いけないことは、手軽にわからうとして、人間である先生にむかひ簡単に質問を發することである。

わからないこと

人生にわかる事は少なく、わからない事が大部分である。私も以前には、「なぜですか、なぜですか、」と神に質問して、神の説明を迫った。神はただ憐れみの深いまなざしで私を見て下さるだけで、答えを与えて下さらなかった。

今では私は、すべてを神は知り給ふと信じ、神は最善をなし給ふと信じ、私を天に召して私の目の涙を拭いて下さる日、すべての事は説明を待たずして私にわからせて頂けると信じて、神の答を追求しない。わからぬ事は、わからないままに、全面的に神によりたのむところに、我らの心の平安が与えられるのである。

鷲のごとく

今年1月27日で私は満61歳になる。これは私の父の世を去り給うた年齢であることを思へば、私も老いの気配を感じないことはないが、しかし私に託された神の言葉の重荷を負うて走らんがため、神が今年も私に気力を加へて、鷲のごとく翼を張らせ給はんことを祈る。

病床の友へ

病床に高熱を發して、生死の境に揺られる友よ。生きるはキリスト、死ぬるは益である。一切を神に委ねよ。終まで耐へ忍ぶ者は救われる。

病が癒えたら生き甲斐のある生活を送らうと、療養にはげむ友よ。善いかな、善いかな、君に恢復の望みの与へられたこと。しかし生き甲斐のある生涯はこの世だけのことではない。来世こそ真に生き甲斐ある生涯であることを忘れてはいけない。われらは身に居ても、身を離れても、御意に適ふことをつとめるところに真の生き甲斐があるのである。

自然と聖書

神の栄光をあらはすものの第一は、自然である。「もろもろの天は神の栄光をあらはし、大空はその御手のわざを示す。」である。深い光にまたたく星、勇ましくさし昇る太陽。聳える山、逆巻く海。一木一草にも、神の栄光はあらはれて居る。我らは心を神につなぐために、しばしば出でて自然の中に立つべきである。

孤独の友よ、野に出でて神に祈れ。

しかしながら、人は自然だけで神の栄光を知ることは出来ない。聖書によって神の律法と教訓とが示されるのでなければ、人は神を知ることが得ないのである。「エホバの法は完くして靈魂を生きかえらしめ、エホバの証詞は堅くして愚かなる者を智からしむ、」とある通りである。

我らは聖書に親しみ、よく之を読み、学び、少なくともいくつかの聖句を暗誦していることが望ましい。人生における危機において、また何かを判断しなければならぬ時において、聖霊はしばしば我らの暗記している聖句に乗って我らの霊に臨み、我らを危地より救い出し、または右すべきか左すべきかを教へ給ふのである。